冬柏（とうはく）

【復刻版】

与謝野寛・晶子＝主宰

昭和5（1930）年～昭和27（1952）年

全26巻・別冊1（全7回配本）

揃定価＝本体47万円＋税

鞍馬寺蔵

『明星』終刊後、晩年の与謝野寛・晶子が最も力を注いだのが雑誌『冬柏』であった。寛が昭和一〇（一九三五）年、晶子が昭和一七（一九四二）年に没して後、平野万里、田中悌六、近江満子らが二人の遺志を引き継ぎ、昭和二七（一九五二）年まで刊行された。

収録内容は、短歌を中心に現代詩・随筆・小論・漢詩・絵画・写真等幅広い。また「消息」欄は寛・晶子をはじめ新詩社の同人の活動や動向が詳細に記されていて、一〇頁以上にわたる号もあり、貴重である。

『明星』同様、寛・晶子研究に必須の、そして短歌史また広く文学や芸術研究に欠かせない重要資料である。

不二出版

与謝野晶子最後の抒情の砦

馬場あき子

『冬柏』全二十六巻が復刻される。与謝野寛晶子夫妻が主宰した最後の雑誌として貴重な資料でもあるが、昭和短歌史の中では長らく光が当たることはなかった。『冬柏』は昭和五年に創刊された。『明星』廃刊後の浪漫系の人々は『スバル』や『日光』に拠る一時期を持ったが、晶子や寛が晩年に真に情熱を注いだのは、親愛する人々の絆に支えられ、平野万里というよき協力者を得て刊行された『冬柏』であろう。

創刊にあたっては木下杢太郎や尾崎咢堂、吉田精一、茅野蕭々などが筆を執り、石井柏亭の挿画もあり豪華であったが、昭和初期の短歌界はプロレタリア短歌の動向に注目が集まり、『冬柏』の文芸的主張は微力であった。しかしここには晩年の与謝野夫妻が思い究めてゆきついた志があった。それは時代の流れにつかず、むしろその人生を賭けて求めた一つのものを遂げようとする潜熱的な情熱による文学への問いである。

『冬柏』は晶子が文化学院の学監であった時期と重なっている。晶子はすでに歌壇外に身を置くという指向のもと、若い世代に文学の理想を語る場を享受し、歌はその人生の本流に身をゆだねて詠む方向に赴きつつあった。

戦争への苦い道を歩みはじめた時代の中で、晶子にとって『冬柏』は抒情をもってする究極の反措定であり、その砦であったといえる。『冬柏』の復刻によって、晶子の晩年の資料が大きく開顕するであろうことを思うと未知なるものへの出会いに高まる期待感は大きく膨らむばかりである。

（歌人）

昭和短歌史によみがえる近代抒情の香気

太田　登

短歌や俳句という短詩型文学にとって、結社は重要な意味をになう。与謝野鉄幹（寛）によって創始された東京新詩社のように傑出した歌人と豊潤な作品を生みだした短歌結社を見つけることは至難である。それは近代詩歌の黄金期を確立した与謝野寛・晶子が新詩社という結社に注いだ愛情と信頼がいかにゆるぎのないものであったかを意味し、いわば『冬柏』はその愛情と信頼の結晶であると明言できる。

たとえば昭和期の寛と晶子には旅行詠が多くなる。この旅行詠をとおして国内はもとより海外在住の社友たちと短歌を詠むよろこびを共有しながら、寛と晶子を中心とした浪漫的な同心円が形成された。小金井喜美子、森茉莉、小堀杏奴らの女性作家、有島生馬、石井柏亭らの画家、尾崎咢堂、高田保馬らの政治家、学者との人脈によって、その同心円は多彩な広がりをみせた。

大正期以後の新詩社の動向をめぐって、「短歌史的な意味はほとんどない」「短歌史的には何らの問題もふくんでいない」という一面的な見方もある。しかし昭和期の寛と晶子が新詩社という結社を基盤とし、『明星』の復興を期していた『冬柏』の全容をつぶさに知れば、誌面にみなぎる近代抒情の香気が昭和短歌史に新たな光輝をもたらしたことに気づくであろう。

（天理大学名誉教授・与謝野晶子倶楽部会長）

歌誌『冬柏』復刻で明らかになる「明星」の全貌

澤　正宏

短歌雑誌『冬柏』（昭和五年～同二七年）は、近代詩歌の出発を鮮やかに刻印した文芸雑誌『明星』（第一次・明治三三～同四一年）の再興を願って発行された。この間、第二次『明星』（大正一〇年～昭和二年）も発行されたのだが与謝野晶子、寛の夢は叶わず、次いで、判型も小さく、薄く地味ではあったが、嘗ての新詩社の機関誌として『冬柏』は発行されたのであり、これは、最初期『明星』の再興を賭けた最後の挑戦でもあったわけである。

この度、その『冬柏』全二十三巻（他に年刊集一冊）、全一九一冊（同前）が、長い年月にわたる収集の困難を乗り越え、二年三カ月をかけて不二出版から復刻（復刻版は全二十六巻）されることになった。『冬柏』復刻の意義は、華々しかった明治期『明星』の晶子、寛（当時は鉄幹）とは違う、まだよく知られていない（『冬柏』は直接頒布制）昭和初期の二人に、詩歌、随筆などを含む著作を通じて出会えるということである。二人に関する会員などによる言及も多く、この意味でも『冬柏』は第一級の資料である。例えば、特筆しておきたいことのひとつに寛の「漢詩」がある。漢詩は寛の死後刊行の選詩集ともいうべき『采花集』（昭和十六年）にも採られていないので、『冬柏』に掲載された約二十首から何が見えるのかも大切な課題である（既に、西村富美子氏の詳細な調査、研究がある）。

ともあれ、第一次、二次『明星』、『冬柏』の三誌が揃ってトータルな「明星」研究は完結する。戦前、戦中、戦後とまさに「冬の時代」を生きた『冬柏』はまた、岩野喜久代など戦後の歌人を輩出するルーツにもなっている。「明星」の命脈を探り、その可能性を検証するためにも、今回の『冬柏』の全復刻を期待する次第である。

（福島大学名誉教授）

歌人・与謝野晶子の全容が明らかに

今川英子

近代第一の女性歌人与謝野晶子は、短歌以外にも評論、詩、エッセイ、小説、古典注釈・現代語訳などあらゆる表現手段を持ち、幅広い活動を行ったが、生涯歌人であったことは衆目の一致するところであろう。しかしながら晶子の歌として知られ評価されているのは、多くが明治・大正期の初期の作品であり、昭和期の作品はほとんど知られていない。

『明星』の後継誌として発行された『冬柏』は、一九三〇（昭和五）年から、晶子没後も近江満子らにより一九五二（昭和二七）年まで継続発行された。この『冬柏』に掲載された晶子の歌数は、総計一万六七一首にのぼるといわれ、寛が亡くなるまでほぼ毎月行われた吟行旅行、招待旅行では、その都度、何十首、時には百首を超えて作歌され満載された。晶子最終歌集『白桜集』は、寛没後の『冬柏』誌上の短歌約五千首より、平野万里が二千五百首を選歌して編んだ。

今、『冬柏』全冊が復刻されることにより、ようやく晶子のみならず『明星』以降の「新詩社」同人の活動の全容が明らかになりつつある。

ところでこのたびの『冬柏』全冊復刻を可能にしたのは、近藤晉平氏の学恩によるものである。氏は九州での与謝野晶子、寛研究の第一人者で、夫妻の九州での動向や知友との交流を実証的に調査・研究され、これまでにも夫妻と白仁秋津、後藤是山などとの往復書簡など、次々と新資料を発表してこられた。調査途上で、熊本県球磨郡多良木町の宮元尚書斎に、『冬柏』のほぼ全冊の揃いが残されていることを発見され、今回の復刻につながった。心よりの敬意を表するものである。

（北九州市立文学館館長）

見　本

▶第1巻第1号

冬柏

第壹號

目次

伊豆詠草（與謝野晶子）……二
熱海（石井柏亭）……四
風籟集（木下杢太郎）……六
船人の歌（赤木毅）……九
澄める陰影（新居格）……一一
西戸崎に遊ぶ（白仁秋津）……一六
押韻に就いて（小森鹿三）……一八
雑詠（尾崎咢堂）……二三
吾子第三歳（江南文三）……二五
書齋の塵（吉田精一）……二八
都會人（茅野蕭々）……三一
鷺と月と（平野萬里）……三一
歌集「ひろ野」序（與謝野寛）……三三
夕の硝子（田中悌六）……三六
野の人（田澤榮子）……三八
低き笛（掛貝芳男）……三九
うす雪（前澤絢子）……四〇
「霧島の歌」（萬里）……四〇
春雪抄（平野萬里）……四一
雨中巡禮（小金井喜美子）……四四
山居雜詠（内山英保）……四六
伊東にて（關戸信次）……四六
窓に倚る（桑野信子）……四七
風の言葉（高田保馬）……四八
火の海（吉野一枝）……五〇
遊冬小景（西田藩之輔）……五一
寒ざくら（岡田克子）……五三
磯の雨（兼藤紀子）……五三
鳴と波（菅沼宗四郎）……五三
幻覺と春（渡邊六郎）……五三
長兄を哭す（水木彦）……五四
若き素描（熊坂滿）……五五
途上（村上操）……五五
山陰より（三島祥道）……五六
港の人（山西薄明）……五七
心の散歩（猪瀬槌子）……五七
新詩社詠草……五八
沙上の草（與謝野寛）……六一
消息……六四
表紙（廣川松五郎）

刊行の辭

昨冬冬至の夕、與謝野晶子夫人の五十の賀筵が東京會館で催された時、席上德富猪一郎先生の御挨拶があつた。それは極めて興味深いものであつたが、終りに先生は明星の休刊を遺憾とせられ、著者と讀者との間を永年結びつけて居た親しむべき絆をこの際何とかして繋ぐやう切に御奬めがあつた。先之新詩社の若い人人の間にも發表機關の必用が感ぜられてゐたので、於是相談一決して爾來準備を急ぎここに本誌の刊行を見るに至つた。冬柏といふ名を與へたのもその緣によるのである。

明星の再興はもつと望ましいことだが、與謝野家の負擔を甚だ重からしめる虞があつて俄に出來にくい。冬柏はそこへ行く道程として一時之に代るものである。同人の僅少な據金を本として出すものであるからその體裁の如きも極めて貧しく明星に比し同日の談ではないが、無きには勝るであらう。とは言へ內容は殆ど全部同樣與謝野先生の手で整へられるものであるから、その點は明星に變りはない積りである。唯當分同人の一人として事務に當る小生の趣味が田舍びて好んで時代の後端を行く處から、御不滿の方も多からうと思ふが、暫く御辛棒が願ひたい。その代り永續性はあらうかと思ふ。幸にして本誌が漸次生長し、經濟上に獨立し得る域に達したら卽時明星の名に復すると共に體裁も一變するのである。それ迄待つて頂きたい。（萬里）

◀第1巻第4号

山陰遊草（一）　與謝野晶子

皐月よしいつしか海に變るべき砂濱しろき山陰道よ

朝日にも月の初めの姿にも逢はざる北の海の砂山

人踏めば不思議の砂の鳴る音も寂しき數の北の海かな

千鳥鳴く北の沙丘のならひとて松傾ける白瀧の濱

抜きぬべく葦かびほどの御社も立てる沙丘の眞白かりけれ

北の海みづの江の濱岬をばひらきて若き浦島を待つ

網野浦國の中には立ちたれど見えもわたるは北の外海

外海のみさきと島の中にあり五月の花の牡丹の入日

奥丹後はての網野の浦にして入日をわれは送る旅人

めでたけれ黄なる蓮をば上にして盛りの盡きし落日の花

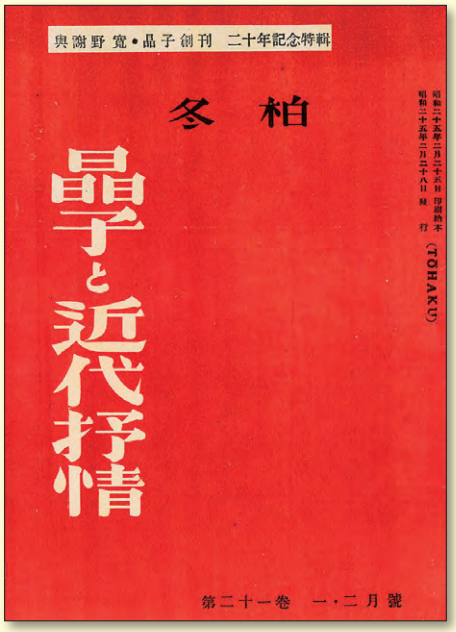
浦島は別れきたりし都とも見けらし北の海の落日

みづのえの浦にわれ立つ落日が沿海州にいたりつくころ

うす藍に松山の裾けぶる時岩梨の實の酸く悲しけれ

水の鳴り丹後五郡をかこみたる山の清らに暮れ行く五月

大江山櫻の山の高松に居隱るるほど遠きなりけり



消息

○暑と盆の休みとで、編輯も印刷の方も少し遅れました。併し東京の同人は皆元氣ですから御安心下さい。八月の初めには二十人ほどで八丈島を親に行く筈です。暑い季節に暑い方へ行くのは物好きに違ひないのですが、一萬噸以上の加賀丸で特に親光客を載せて一晝二夜で往復すると云ふ珍しい催しがあるのを、よい機會として出掛けるのです。

○半折書畫會は幸に豫定以上の申込を受け、畫家達にしばしば書き足して頂いて、既に配布を完了しました。應募して下さつた諸氏の御厚意を茲に感謝致します。

○六月廿九日に宅で久振に開いた短歌會には、石井柏亭、平野萬里、吉田精一、三樹退三、井上苔渓、内山英保、關戸信次、渡邊三角洲、桑野信子、上田美都子、北川憲礎子、掛貝芳男、田中悌六、奥田松太郎の諸氏が集られ、二度に切つて各自に廿首と五首とを詠みました。

○「冬柏」の讀者は追追に増して行くのを難有く思つてゐます。併し安全に維持して行くには今の倍の讀者があつて欲しいのですから、讀者達が少なくも一人の新しい讀者を紹介して下さるやうにお願ひ致します。

○私の宅で去年の春から、特に婦人達のために毎週火曜日の午後一時から短歌會を開いてゐますが、この九月から其の新會員の入會を迎へたいと思ひます。會規は毎週火曜日に一人拾首の歌を持寄り、更に席上で拾首を即詠し、併せて私が加筆し批評するのです。會費は束修金五圓、月謝金七圓。新會員は八月中に「東京市外、下荻窪三七一與謝野晶子」へ御申込み下さい。

（晶子）

○前號二七四頁下段四行の次に「武内貞子」さんの署名を脱しました。おゆるし下さい。（悌六）

○小生事去る四日夜行にて大坂着、翌五日午前十時二十分木津川尻より日本航空輸送會社の水上飛行機にて、生れて初めての空中旅行、午後一時二十分福岡着、のりかへ、午後三時二十分朝鮮蔚山着、赤のりかへ、午後五時三十分京城着。スピード時代とは言ひながら、あまり速きに今更ながら驚き入り候。更に驚き入りたるは、飛行機より下りたる小生は、腰が抜けて一歩も歩くことを得ず、更に驚きたるは、兩耳がカラツンポになりて何も聞えず、まことにみじめなる格好にて泣くにも泣かれず候ひき。操縦士の申すには、機上にて、椅子にあまり力を込めてしがみついてゐたためなり、耳は初めは誰でもツンポになる、何んでも機上では、氣を安樂に持ち、大きな大洋丸の船上にでも乘つた氣持で、靈寢をするつもりか、または浴衣掛の散歩氣

主要執筆者一覧

有島生馬
有賀　精
池田亀鑑
石井柏亭
石上露子
市丸利之助（柏邨）
井上苔渓
岩野喜久代
内山英保
浦辺田鶴子
江戸さい子
江南文三
近江満子
大口善信
岡崎よね子
尾崎行雄（咢堂）
掛貝芳男
川上喜久子
木田園子
木下杢太郎
工藤大成
黒田鵬心
孝橋謙二
小金井喜美子
後藤是山
小林喜久子
小林　栄
小林天眠
小日山直登
小堀杏奴
佐藤春夫
信楽真純
島谷静子
島谷亮輔
白仁秋津
菅沼宗四郎
諏訪順次郎
関戸信次
高木藤太郎
高田保馬
高橋英子
高村光太郎
武内正躬
田中（千ヶ崎）悌六
田沼勝之助
茅野蕭々
津田青楓
土井多紀子
戸川秋骨
中川紀元
中込純次
中田天泉
中谷善次
新居　格
西田猪之輔
西村一平
丹羽安喜子
丹羽俊彦
浜　梨花枝
平野万里
広川松五郎
広瀬哲士
深尾須磨子
藤岡長和（玉骨）
堀　忠義
堀口大学
正宗得三郎
真下喜太郎
間島磐雄
松浦静麿
松永周二
万造寺斉
三樹退三
三島祥道
三宅克己
三宅雪枝
宮元　尚
茂手木みさを
森　茉莉
山下新太郎
山城正忠
由井彦太郎
与謝野晶子
与謝野寛
吉野竹治
渡辺湖畔

『冬柏』時代の与謝野寛・晶子と旅・短歌

＊参考文献　平子恭子 編著『年表作家読本 与謝野晶子』（河出書房新社）、沖良機 著『資料 与謝野晶子と旅』（武蔵野書房）

年月	主な旅行先	『冬柏』
昭和5（1930）年		
1月	〔静岡〕伊東・伊豆山	
2月	〔静岡〕熱海	1巻1号「伊豆詠草」晶子57首
3月	〔神奈川〕葉山	
4月	〔神奈川〕鵠沼	1巻2号「旅中春興」晶子65首
5月	〔京都〕峰山・宮津・天橋立〔兵庫〕城崎〔島根〕玉造温泉・宍道湖〔鳥取〕皆生温泉・大山	1巻3号「石の床」晶子59首
6月	〔鳥取〕三朝温泉〔京都〕京都	1巻4号「山陰遊草」寛 218首 晶子198首
8月	〔東京〕八丈島〔神奈川〕鎌倉	1巻6号「八丈詠草」寛 69首 晶子69首
9月	〔東京〕深大寺	1巻7号「金沢風景」晶子66首
10月	〔静岡〕一碧湖	1巻8号「深大寺その他」晶子69首
11月		1巻9号「伊豆遊草」晶子59首「吉備の秋」晶子29首
12月	〔富山〕宇奈月温泉	2巻1号「霜の華」晶子69首
昭和6（1931）年		
1月	〔石川〕金沢・和倉温泉・片山津温泉・山代温泉〔福井〕東尋坊・芦原温泉・永平寺〔愛知〕名古屋〔東京・神奈川〕大垂水〔尾花〕峠	2巻2号「北陸冬景」晶子209首
2月	〔茨城〕筑波・霞ヶ浦・鹿島神宮・潮来	2巻3号「尾花山の二日」晶子70首
3月	〔東京〕奥多摩	2巻4号「常陸帯」晶子39首
4月	〔神奈川〕箱根	2巻5号「雨の箱根」寛 39首 晶子59首
5月	〔山梨〕桂川〔北海道〕函館・小樽・定山渓温泉・鴨川温泉・札幌・北海道大学・旭川・層雲峡	2巻6号「鎌倉詠草」寛 88首「牡丹」晶子9首「舟遊半日」晶子19首
6月	〔北海道〕苫小牧・白老・登別・室蘭・洞爺湖・函館〔岩手〕花巻	2巻7号「北遊詠草」寛 189首 晶子189首
7月	〔神奈川〕逗子	2巻8号「夏日雑詠」晶子49首
8月	〔京都〕京都〔奈良〕奈良〔和歌山〕高野山〔大阪〕大阪・浜寺〔兵庫〕芦屋・神戸	2巻9号「近畿遊草」寛 149首 晶子119首
9月	〔群馬〕法師温泉	2巻10号「法師温泉集」寛 79首 晶子99首
10月	〔大分〕別府・久住・湯布院・中津〔徳島〕徳島・鳴門〔香川〕高松・琴平	2巻11号「西国の秋」寛 129首 晶子139首
11月	〔愛媛〕川之江・松山・道後温泉〔栃木〕鬼怒川温泉	2巻12号「秋風遍路」寛 149首 晶子129首
12月		3巻1号「鬼怒川の冬」寛 79首 晶子79首
昭和7（1932）年		
1月	〔神奈川〕真鶴・吉浜・湯河原	3巻2号「東海のほとり」寛 39首 晶子79首
2月	〔静岡〕熱海・伊東	3巻3号「伊豆の春」寛 109首 晶子99首
4月	〔静岡〕伊豆山	3巻5号「熱海雑詠」寛 49首 晶子59首「蓬の香」晶子39首
5月	〔群馬〕水上〔新潟〕湯沢温泉	3巻6号「上越遊草」寛 59首 晶子69首

年月	主な旅行先	『冬柏』
6月	〔栃木〕日光・中禅寺	3巻7号「しら嶺葵」寛 79首 晶子79首
7月	〔長野〕軽井沢	3巻8号「浅間の沙」寛 79首 晶子79首
8月	〔大分〕別府・湯の原温泉・湯布院〔熊本〕阿蘇・人吉・天草	3巻9号「西海遊草」寛 159首 晶子168首
9月	〔神奈川〕鎌倉	3巻10号「鎌倉にて」寛 29首 晶子19首
10月	〔神奈川〕鎌倉〔山梨〕山中湖・精進湖	3巻11号「裾野の秋」寛 39首 晶子79首「鎌倉の一夜」寛 9首 晶子19首「姉を傷む」晶子9首
11月	〔神奈川〕鎌倉〔静岡〕湯ヶ島温泉・碧湖	3巻12号「半島の雨」晶子29首
12月		4巻1号「天城のもと」晶子79首
昭和8（1933）年		
1月	〔群馬〕伊香保温泉〔静岡〕三津	4巻2号「五松山荘抄」寛 19首 晶子55首「山上の雪」寛 89首 晶子99首
2月	〔静岡〕熱海	4巻3号「南枝抄」寛 29首 晶子29首
3月	〔静岡〕伊豆山〔神奈川〕箱根	4巻4号「春遊両日」寛 39首 晶子69首
4月	〔東京〕伊豆大島〔千葉〕三里塚	4巻5号「大島遊草」寛 99首 晶子69首
5月	〔静岡〕熱海	4巻6号「対花抄」晶子69首「東海の上」晶子29首
6月	〔山梨〕上野原〔岡山〕下津井・味野町	4巻7号「依水荘其他」晶子49首
7月	〔岡山〕勝山・津山〔兵庫〕三宮・芦屋〔静岡〕熱海	4巻8号「海より渓へ」寛 109首 晶子79首
8月	〔群馬〕川原湯温泉・草津温泉〔長野〕軽井沢	4巻9号「山上の気」寛 139首 晶子129首
9月	〔静岡〕三津	4巻10号「三津遊草」寛 49首 晶子79首
10月	〔静岡〕一碧湖・熱海〔山梨〕昇仙峡・甲府	4巻11号「抛書山荘の歌」寛 69首 晶子79首
11月	〔富山〕宇奈月温泉・富山・高岡〔石川〕金沢・兼六園・安宅〔福井〕福井・武生	4巻12号「峡中抄」寛 79首 晶子69首「北陸秋景」寛 139首 晶子139首
12月		5巻1号「石上冬晴」寛 18首 晶子20首
昭和9（1934）年		
1月	〔栃木〕西那須温泉	5巻2号「那須の雪」寛 69首 晶子19首
2月	〔千葉〕鴨川・館山	5巻3号「安房の二夜」寛 49首 晶子69首
3月	〔東京〕吉野梅林	5巻4号「楽楽峡観梅」寛 39首 晶子49首
4月	〔神奈川〕箱根〔静岡〕熱海	5巻5号「山より磯へ」寛 29首 晶子79首

年月	主な旅行先	『冬柏』
5月	〔栃木〕塩原温泉	5巻6号「塩原遊草」晶子59首「小金井その他」晶子29首「九如園牡丹」晶子9首
6月	〔静岡〕熱海・一碧湖〔神奈川〕箱根	5巻7号「杜鵑と苺」寛 49首 晶子69首
7月	〔群馬〕赤城山	5巻8号「赤城山の歌」寛 89首 晶子69首
8月	〔新潟〕赤倉温泉〔長野〕野尻湖・上林・軽井沢〔山梨〕上野原〔静岡〕熱海	5巻9号「山山の夏」寛 89首 晶子100首
9月	〔群馬〕四万温泉	5巻10号「積棚扇」晶子49首
10月	〔群馬〕湯檜曽温泉〔新潟〕長岡・三条・新潟	5巻11号「四万の秋」寛 49首 晶子79首
11月	〔新潟〕佐渡〔神奈川〕湯河原	5巻12号「続越佐詠草」寛 159首「峡谷の秋」晶子149首 晶子19首
12月		6巻1号「疎花」晶子39首
昭和10（1935）年		
1月	〔神奈川〕鎌倉	6巻2号「鎌倉詠草」寛 59首 晶子69首
2月	〔静岡〕熱海〔静岡〕土肥温泉・今井浜温泉	6巻3号「熱海詠草」寛 69首 晶子79首
3月	＊寛と晶子、最後の旅〔神奈川〕観音崎 ＊26日、寛永眠（満62歳）	
4月		6巻4号「空即是色」寛 83首「色即是空」晶子89首
5月	〔神奈川〕箱根	6巻5号「寝園」晶子106首
6月	〔新潟〕長岡	6巻6号「山荘の客」晶子79首「反古の塵」晶子19首
7月	〔山形〕温海温泉	6巻7号「越より出羽へ」晶子69首
8月	〔長野〕蓼科〔群馬〕新鹿沢温泉	6巻8号「白樺抄」晶子114首
9月	〔静岡〕熱海〔神奈川〕吉浜	6巻9号「露華数種」晶子99首
10月	〔愛知〕名古屋・蒲郡	6巻10号「秋風往来」晶子88首「彼岸会」晶子13首
11月		6巻11号「尾参詠草」晶子69首「万里荘菊花の日」晶子19首
12月		7巻1号「菅郎を送る」晶子3首「花の氷」晶子59首
昭和11（1936）年		
1月	〔静岡〕伊豆山・三津	7巻2号「東豆西豆」晶子89首「海の雲」晶子43首
2月	〔神奈川〕大磯・箱根・吉浜〔静岡〕熱海	7巻3号「春雪」晶子99首
3月	〔群馬〕伊香保温泉	7巻4号「山に憶ふ」晶子79首
4月	〔静岡〕清水〔千葉〕鵜原・安房天津	7巻5号「満耳潮音」晶子79首
5月	〔神奈川〕逗子〔兵庫〕芦屋〔大阪〕浜寺〔京都〕鞍馬・京都	7巻6号「晩春行」晶子79首「逗子詠草」晶子16首
6月		7巻7号「霧閣雲窓章」晶子79首
7月	〔静岡〕清水・浜名湖・熱海	7巻8号「仏灯に近く」晶子119首「多摩川集」晶子15首
8月	〔長野〕上高地・白骨温泉・浅間温泉	7巻9号「中部山岳抄」晶子99首
9月	〔福島〕裏磐梯・猪苗代湖・会津若松〔長野〕軽井沢	7巻10号「会津詠草」晶子89首
10月	〔神奈川〕箱根・吉浜〔静岡〕熱海	7巻11号「秋景軽井沢」晶子89首
11月		7巻12号「衆山抄」晶子89首
12月	〔神奈川〕鎌倉・逗子	8巻1号「片瀬その他」晶子49首

年月	主な旅行先	『冬柏』
昭和12（1937）年		
1月	〔静岡〕興津・日本平・清水	8巻2号「墨の羽衣」晶子119首
2月	〔新潟〕長岡・瀬波温泉〔静岡〕伊東・大室山・熱海	8巻3号「江山雪賦」晶子79首
3月	＊晶子脳溢血で倒れ約一ヶ月臥床	8巻4号「幽歩抄」晶子89首
5月		8巻5号「病む」晶子29首
6月	〔東京〕青梅・御岳・小河内	8巻6号「山川交響楽」晶子69首
7月	〔神奈川〕箱根	8巻7号「湖北湖南」晶子89首
8月	〔神奈川〕吉浜・逗子・鎌倉・横浜	8巻8号「冷露行」晶子109首
9月	〔長野〕上山田温泉・姨捨山・三笠	8巻9号「千曲川」晶子109首
10月	〔静岡〕一碧湖・湯ヶ島〔神奈川〕箱根〔栃木〕日光・中禅寺湖	8巻10号「時雨抄」晶子99首
11月		8巻11号「霜葉二荒山」晶子99首
12月	〔静岡〕伊豆多賀	9巻1号「多賀の湯」晶子99首
昭和13（1938）年		
1月	〔静岡〕熱海	9巻2号「江楼夢」晶子79首
2月	〔神奈川〕箱根〔静岡〕伊豆多賀	9巻3号「綴る雪」晶子99首
3月	〔神奈川〕鎌倉	9巻4号「梅花の日」晶子69首
5月		9巻5号「嶺頭春色」晶子99首
6月	〔神奈川〕湯河原	9巻6号「五月雨抄」晶子99首
7月	〔静岡〕今井浜・下田〔神奈川〕湯河原	9巻7号「南豆詠草」晶子79首
8月		9巻8号「続湯河原抄」晶子79首
9月	〔長野〕池の平・軽井沢	9巻9号「山国を行く」晶子119首
10月	〔東京〕伊豆大島・式根島・新島	9巻10号「島島を行く」晶子99首
11月	〔山梨〕河口湖・西湖・精進湖・山中湖	9巻11号「霜葉の時」晶子89首
昭和14（1939）年		
1月	〔静岡〕伊豆山	10巻1号「早潮晩潮」晶子59首
2月	〔神奈川〕箱根	10巻2号「雪と春水」晶子119首
3月	〔神奈川〕鵠沼	10巻3号「沙上の夢」晶子69首
4月	〔神奈川〕吉浜〔静岡〕一碧湖〔山梨〕上野原	10巻4号「花のある風景」晶子109首
5月	〔栃木〕中禅寺湖	10巻5号「野州花」晶子69首
6月	〔埼玉〕武蔵嵐山	10巻6号「比企の渓」晶子29首
7月	〔静岡〕嵯峨沢温泉・湯ヶ島温泉	10巻7号「天城の道」晶子69首
8月	〔長野〕小諸・星野温泉	10巻8号「高原行」晶子79首
9月	〔神奈川〕箱根	10巻9号「秋風」晶子59首
10月	〔群馬〕伊香保温泉	10巻10号「伊香保遊草」晶子59首
11月	〔群馬〕法師温泉	10巻11号「奥上州」晶子79首
12月	〔神奈川〕吉浜	11巻1号「極月海景」晶子59首
昭和15（1940）年		
1月	〔山梨〕上野原	11巻2号「積陰開かず」晶子79首
2月	〔神奈川〕箱根	11巻3号「須賀川のほとり」晶子79首
3月	〔静岡〕一碧湖	11巻4号「櫟の幕」晶子69首
4月	〔神奈川〕真鶴〔静岡〕三津〔兵庫〕芦屋・有馬温泉・須磨〔京都〕鞍馬山・天橋立	11巻5号「白華抄」晶子79首
5月	＊晶子脳溢血で倒れる	
6月		11巻6号「残花行」晶子98首
昭和16（1941）年		
7月	＊7～9月、山梨県上野原の依水荘にて療養	
9月		12巻10号「依水荘詠草」晶子19首
10月		12巻11号「続依水荘」晶子19首
昭和17（1942）年		
5月	＊29日、晶子永眠（満63歳）	

◀第2巻第11号「法師温泉にて」

◀第4巻第5号「大島に於ける一行」

関連図書

日光社＝発行〔一九二四年～一九二七年刊〕

日光　全10巻・別冊1

体裁――A5判／上製／総4、688頁
別冊――解説（田中　綾）・総目次・索引
〔分売価格　本体1、000円＋税〕
推薦――佐佐木幸綱／北原東代／山田　航
価格――本体180、000円＋税

本誌は、大正歌壇の停滞を危惧した北原白秋らが関東大震災後に刊行し、口語短歌運動の流れを勢いづけた。北原白秋、前田夕暮、古泉千樫、土岐善麿、川田順、釈迢空（折口信夫）、石原純らが編集同人として参加した。

当時の最有力誌『アララギ』の歌風に飽き足らない人々が発表の場を求めて集まり、自由で清新な誌上の雰囲気の中で互いに切磋琢磨し後世に名作を残していくことになる。

荻原井泉水＝主宰〔一九一一年～一九四四年刊〕

層雲　全97巻

体裁――A5判／上製／総38、722頁
推薦――金子兜太／佐佐木幸綱／坪内稔典／夏石番矢／山下一海
価格――本体1、652、000円＋税
第Ⅰ期〔明治・大正期〕全47巻
全10回配本
第1回配本＝本体32、000円＋税
第2～10回配本＝各本体80、000円＋税
第Ⅱ期〔昭和戦前期〕全50巻
全10回配本、各本体90、000円＋税

本誌は、形式をきらい、内在的・主観的立場から句を生み出すために、季語無用・定型破壊を掲げた自由律俳句の舞台となった俳句雑誌である。自由律俳句の牙城として野村朱鱗洞・芹田鳳車・尾崎放哉・種田山頭火・栗林一石路などの俳句作家を輩出した。

復刻版 冬柏（とうはく）

全26巻・別冊1

概要

◉体　裁＝A5判／上製／総約15、300頁
◉別　冊＝総目次・索引
＊別冊のみ分売可＝本体2、000円＋税
ISBN 978-4-8350-8157-1
◉推　薦＝馬場あき子／太田 登／澤 正宏／今川英子
◉揃 定 価＝本体470、000円＋税
◉原本提供＝宮元尚旧蔵（ひさし） 他

◉2017年度合計＝110、000円＋税

配本	復刻版巻数	原本巻数	原本発行年月	配本年月 本体価格
第1回配本	第1巻	1巻1号～9号	昭和5年3月～11月	2017年10月 56,000円＋税 8350-8123-6
	第2巻	2巻1号～6号	昭和5年12月～6年5月	
	第3巻	2巻7号～12号	昭和6年6月～11月	
	別冊（総目次・索引）			
第2回配本	第4巻	3巻1号～6号	昭和6年12月～7年5月	2018年1月 54,000円＋税 8350-8128-1
	第5巻	3巻7号～12号	昭和7年6月～11月	
	第6巻	4巻1号～6号	昭和7年12月～8年5月	

◉2018年度合計＝144、000円＋税

配本	復刻版巻数	原本巻数	原本発行年月	配本年月 本体価格
第3回配本	第7巻	4巻7号～12号	昭和8年6月～11月	2018年6月 72,000円＋税 8350-8132-8
	第8巻	5巻1号～6号	昭和8年12月～9年5月	
	第9巻	5巻7号～12号	昭和9年6月～11月	
	第10巻	6巻1号～6号	昭和9年12月～10年6月	
第4回配本	第11巻	6巻7号～11号	昭和10年7月～11月	2018年11月 72,000円＋税 8350-8137-3
	第12巻	7巻1号～6号	昭和10年12月～11年5月	
	第13巻	7巻7号～12号	昭和11年6月～11月	
	第14巻	8巻1号～4号、『別刊冬柏』、5号、6号	昭和11年12月～12年6月	

◉2019年度合計＝216、000円＋税

配本	復刻版巻数	原本巻数	原本発行年月	配本年月 本体価格
第5回配本	第15巻	8巻7号～9巻1号	昭和12年7月～12月	2019年4月 72,000円＋税 8350-8142-7
	第16巻	9巻2号～7号	昭和13年1月～7月	
	第17巻	9巻8号～10巻3号	昭和13年8月～14年3月	
	第18巻	10巻4号～10号	昭和14年4月～10月	
第6回配本	第19巻	10巻11号～11巻6号	昭和14年11月～15年6月	2019年8月 72,000円＋税 8350-8147-2
	第20巻	11巻7号～12巻4号	昭和15年7月～16年3月	
	第21巻	12巻5号～12号	昭和16年4月～11月	
	第22巻	13巻1号～8号	昭和16年12月～17年7月	
第7回配本	第23巻	13巻9号～14巻4号	昭和17年8月～18年3月	2020年1月 72,000円＋税 8350-8152-6
	第24巻	14巻5号～15巻3号	昭和18年4月～19年2月	
	第25巻	15巻4号～20巻春夏季号	昭和19年3月～24年6月	
	第26巻	20巻秋季号～23巻春季号『年刊冬柏集』	昭和24年9月～27年3月	

※価格下の数字はISBNを示し、頭に「978-4-」が付きます。

※「冬柏」について（2巻1号「消息」より引用）
――これは国語の「ツバキ」（椿）の語原の字で「トウハク」と読んでゐます。――

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084

表示価格はすべて税別